

- 21世紀 心の時代に  
人生百年時代を楽しく学び続ける  
若宮正子……………1
- 座談会  
コロナ禍の学級運営とICT活用～後編～  
藤永啓吾／前田良子／杉本遼……………4
- SDGs×道徳 ……………8
- どうなるこれからの道徳授業……………10

# 道徳 ジャーナル

高校卒業後、定年まで銀行に勤務していたのですが、入社当時のオフィスワークは江戸時代からあまり変わっていませんでした。現在は機械が処理をしてくれている事務作業（計算・札勘定・記帳等）をすべて手作業で、正確・迅速に処理できる人が優秀な社員でした。私は不器用で仕事が遅く、先輩から「まだ終わらないの」と叱られてばかりいました。要するに職場では「お荷物社員」に近い存在でした。

しかし、一九六〇年代以降、銀行業務も機械・コンピュータ化が進み、人間を徐々に「単純な反復作業」から解放してくれました。そういう時代になりますと、手仕事が遅いことは特に問題にならなくなってきました、私が引け目を感じ

## パソコンとの出会い

じる必要がなくなりました。そんなこともあって、私は機械やコンピュータを「大切な味方」と思うようになりました。と言いつても、当時のコンピュータは、一部屋を丸々占領してしまふほど大きなもので、しかも、なかなかデリケートな気難しい存在でした。何しろ重役室にもまだ冷房の入っていない時期から、コンピュータがある部屋には冷房を入れていた、そんな時代でしたから。

当時、アメリカの学者が「近い将来コンピュータは小型化され、テレビや冷蔵庫のように、どこの家庭にでもある時代が来る」と書いておられたのを記憶しています。それが今では、どなたのポケットにも一台ずつ「スマホ」と称するコンピュータが入っている時代になったのですね。

そんなことから、六十歳近くになって普通の

## 人生百年時代を 楽しく学び続ける

21世紀  
心の時代に



ITエヴァンジェリスト

若宮正子

人でも何とか購入できるコンピュータであるパソコンが発売されると、早速買いました。



はじめてパソコンを買ったころの若宮さん。

## エクセルアートの創案

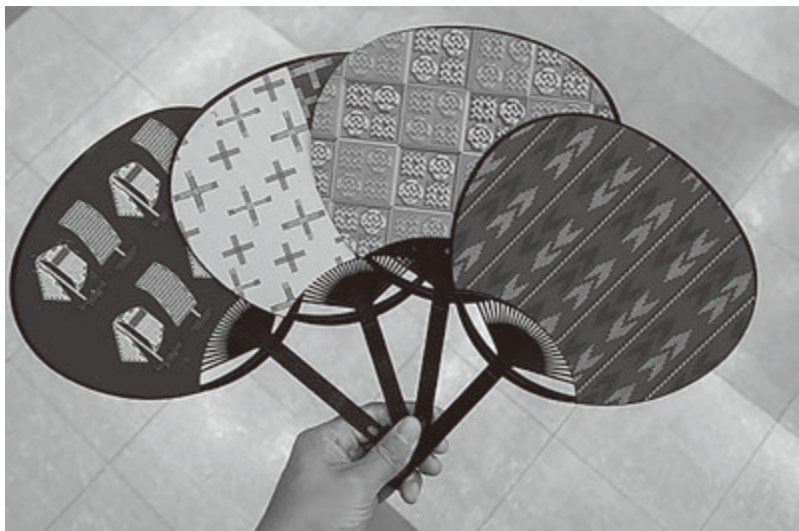
リタイア後の生活、特に母の介護が始まって、あまり外出ができなくなってからも、家に居ながらネットを通じて多くの方々と交流ができ、いろいろな情報をネットを通じて得られました。そこから「家に閉じこもりがちな高齢者こそ、ネットでの交流が大切」と思うようになり、自分と同年代の高齢の方々にパソコンをお教えしていました。

エクセルは、コンピュータとは何かを理解するために重要なソフトですが、シニアには敬遠されがちです。そこで「楽しい入門編」として手芸の好きなシニア女性向けに創案したのが

「エクセルアート」です。

高齢者、なかでも高齢女性は、編み物や手芸が大好き。セルと呼ばれるマス目を好きな色にしたり「塗りつぶし効果」という技を使って色付けしたりしていく遊びはとても気に入ってもらえました。私自身も、すっかりはまってしまい、次々と新しい可能性を試してみました。また、子供たちにも人気がありました。

そのうちに、エクセルアートで作った図柄で



エクセルアートで作った図柄のうちわ。

彩った、バッグやうちわなどのグッズを作るようになり、さらには、自分が着る服の図柄にも使うようになりました。と言いますのも、今では布地へ印刷する技術が進歩し、ネットで手軽に頼めるようになったからです。

## 好奇心をもって学び続けること

私は戦争中に子供時代を送った世代です。満足な小学校時代を送れなかったせいも「もっと知りたい、もっと学習したい」という意欲だけは十分もっています。

私の年代にはそういう方が多かったです。働きながら、高校や大学の夜間部で学ぶ方も大勢おられたのですよ。

人生百年時代を、有意義に楽しく生きるには、生涯学習が必要です。生涯学習続けるために、子供たちへ「学ぶことの素晴らしさ、楽しさ」を教えることこそ大切だと思います。これは「志望校に入れること」「現時点での成績」に一喜一憂するよりずっと大切です。

「もっと学びたい」という気持ちをもち続けながら卒業させてあげてください。

また、絶えず変化し、進歩し続ける世の中で、時代ですから「必要とされる仕事」や「仕事に必要な知識・技能」は急スピードで変わっていく

きます。

私はもともと「新しいもの好き」の体質なので、何か新しいものを見つけるとワクワクします。時間的な制約はありますが、できるだけ新しいものに触れてみるようにしております。時には無理をして疲れることもあります。新しいことに出会えたうれしさが疲れを忘れさせてくれます。

ただ、現在かなり多忙な日々を送っていますので、なかなか新しいものに触れる時間が少ないのが残念です。



講演会にて。

## 子供にパソコンを教えること

子供さんにパソコンを教えるのがいちばん楽

しいです。なかでも、デザイン系の教材では、小学校低学年のお子さんの自由な発想力に刺激を受けることが多いのです。

パソコンを「論理的なものの考え方を学ぶための道具」という範囲に閉じ込めないで「何にせよ、自分がやりたいことを手伝ってくれる道具」と考えたほうがいいと思います。あくまでも道具ですから、道具に振り回されないように注意が必要です。

## 戸惑いや苦手意識の克服

新しいことに取り組むと戸惑うことは多いですが、どんなときも「とりあえずやってみる」「とにかく前進する」が基本です。難しそうだったり、上手く行きそうもなかったりしたらその段階で軌道修正します。

失敗しても、ほかの人にひどい迷惑をかけた、本人が重大なダメージを受けたりしない限りは「失敗という貴重な経験」として自分のメモリーの中に大切に保存しておきます。失敗の経験は、将来の成長のための大切な「宝物」です。

もし、お子さんが失敗して落ち込んでいたら「宝物が増えてよかったね」と言って励ましてあげてください。今のお父さん、お母さんには

きるだけ子供たちにつらい「失敗」や「挫折」を経験させたくない、と思っておられるようですが、人生百年時代の長い人生を生きる子供たちが挫折や失敗を味わわないで生きていくのは難しいと思います。

「若宮さんは、よく八十一歳でプログラミング学習を始める決断ができましたね」と言われることがあります。私は、そういう質問にびっくりします。

私がプログラミングを始めても誰かが死ぬ心配はありません。独特の臭みのある料理をするわけでもないのご近所へご迷惑をおかけすることもありません。パソコンを持っていれば、開発ソフトなどは無料で入手できますから特別お金がかかるわけではありません。

いやになったらやめればいいだけです。やりたいことは、すぐに始めたいと思います。

私自身、苦手なものはたくさんあります。というより得意なもののごくわずかしかなかった。でも、それはそれでいいと思っています。もともと人間って不完全な存在でしょう？「全人人間」なんて存在しない。だから「不完全な生き物」同士、お互いに助け合ったり補い合ったりして生きていけばいいのじゃないかしら、と思っております。

(わかみや まさこ)

〈座談会〉

# コロナ禍の学級運営とICT活用〈後編〉

山口大学教育学部附属光中学校

教諭

藤永 啓吾

東京都国分寺市立第四小学校

主任教諭

前田 良子

東京都足立区立足立小学校

教諭

杉本 遼

前号に引き続き、今回はICT活用についてお話を伺いました。

## 教員と子供の立場からみるICT活用の課題

——コロナ禍でICT活用が急速に進みましたが、どのように思われますか。

**藤永** 私たち教員側はできるだけ積極的に使ったほうがいいと思います。従来の指導方法と同じように、ICTの活用は技量を高める一つのアイテムになりますから、全教科でどんどん使

ったほうがいい。私は教員になった十七年前からパワーポイントで作成したスライドを使って授業を行っていました。なぜ、私がスクリーンとパワーポイントを使った授業を行っていたかというと、実は板書が苦手だったからです。板書せずに、生徒の学力アップの一手法としてパワーポイントを使った授業を行うことにしたのです。専門が理科ですから、写真やグラフなど、スライド化すると見やすく伝えやすい教材になるといふ点もあります。道徳の授業でも、私は黒板とスクリーンの両方を活用して授業を行っています。

一方、子供の立場で考えると、ICTには一長一短があるように思います。私としては「長」より「短」のほうが大きいのではないかと、思うこともあります。

例えば、一年間の授業で使うのは一冊の教科書だけではありません。単元によっては独自の資料を用意したり、著作権を確認しながら他社の教科書教材を使ったりする機会があるでしょう。その場合、独自にまとめてデジタル化した資料を子供に提示しています。

しかしこのオリジナルのデジタル資料を送受信する時間と、紙に印刷して配布する時間を比べると、ほぼ同じです。デジタルの場合、送受信がうまく行えず再起動して同じ操作をするこ





前田良子先生

ともあり、この時間のロスは意外と大きいです。

また、道徳の授業で子供たちの意見を聞く際に、タブレットの画面でボタン選択させると「こんなに簡単に済ませてよいのか」と思うことがあります。自分の意見を示すために黒板に名前カードを貼りに行く作業だと、決断や行動が早い子、遅い子があります。そのような単一的でない不規則な現象こそが人間的なのではないか、とも思うのです。いろいろな人の考えや行動を見ながら自分の内面の変化を感じることも大事だと思います。無駄だと思われがちな時間の中にこそ、道徳的な学びがあるのではないのでしょうか。子供の視点を生かすため、ICTの「長」の部分を最大限に生かし、「短」の部分を検討した上で活用したいと思います。

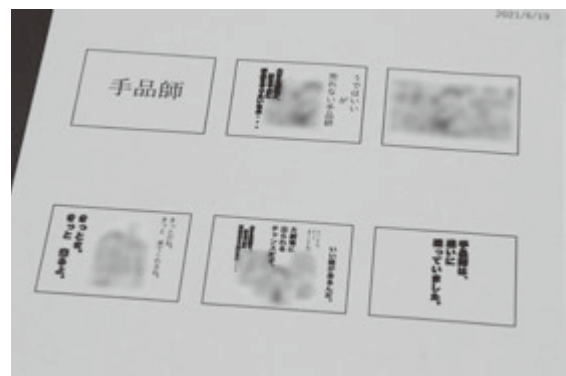


**前田** 藤永先生がおっしゃるように、名前カードであれば学びの途中で自分の意見が変化したときに、簡単に貼りかえることができます。デジタルで済ませてしまうと、心情の変化を見ることが難しいように感じます。教材と指導の内容によってデジタルとアナログをどのように使い分けたらよいか検討が必要だと思います。教員は子供たちに何を考えさせたいか、学びをより深められるのはどの方法なのかを十分研究していく必要があると思います。

私も道徳の授業では、パワーポイントで作成したスライドをスクリーンに映しながら授業を行っています。

子供によく考えさせたい箇所は文字で明記したり、震災に関する教材では、被災地で撮られた写真を用いたりしています。意図的になり過ぎた資料はよくないですが、子供たちが関心をもち、心の変化をもたらす箇所などで、教材提示の際にこうしたデジタル資料は効果的だと思います。

子供の立場で考えると、彼らが大人になったとき、デジタルツールはさらに身近になり、ICT活用は日常的になっていると思うので、子供たちがスキルを習得するために積極的に取り入れていくべきだと思います。けれども、小学校の段階では、ページをめくったり紙に書いた



前田先生が作成した「手品師」のスライド

りという手を動かす作業がとても大切だと思います。まずはこうした土台をしっかり耕してから、ICTを活用していくことを念頭に置きたいと思っています。

**杉本** 私はICTをできるかぎり活用したいと思っています。授業では、ICTを活用しなくてもよい理由を挙げようと思えばたくさんあると思います。なぜなら、これまでICTがなくてもきちんと授業できてきたからです。私は、ICT活用によって自分の授業観が大きく変化し、可能性が広がるのではないかと、とても楽しみにしています。一方で、教育現場以外では、デジタルをどれだけ積極的に活用しているのかという疑問もあります。大人たちは、

\*実際の座談会は、マスク着用の上、ソーシャルディスタンスをとって行いました。



杉本遼先生

対面で行う三十人以上が参加する会議で、どのようにICTを活用しているのでしょうか。自身、そのイメージをまだもっていません。企業などがどのように活用しているかを参考に、まずは我々教員、職員室から変わっていききたいという思いもあります。低学年の子供に、タブレットの扱いを指導するというのは、非常に大変です。

**藤永** ICTを活用すると、確かに利点が多いとは思いますが、私自身の実感ですが、理科の授業では、タブレットを使った授業と、使わなかった授業で、テスト結果を比較した際、タブレット使用の授業を受けたクラスのほうが平均点は高かったです。つまり、ICTをうまく活用すれば、学力アップにもつながります。

一方で、生まれたときからデジタルツールが当たり前のよう存在している世代の人たちが教員になり、授業がICTに偏るようになった

としたら、危うさを感じます。すべての授業のデジタル化が進んだと仮定して、もし、大災害が起き、デジタル教材全般が使えなくなったら授業は崩壊してしまいます。近い将来に起こるかもしれないといわれている南海トラフ地震が起きたとしたら、従来のようにチョークで板書する授業をしなければいけないでしょう。極端にデジタルに頼った指導を行っている場合、こうした不測の事態に柔軟に対応できるでしょうか。今は、コロナ禍だからICT活用の「長」の部分が一時的にフォーカスされていますが、世の中は常に変化していつ何が起きるか分からず、変化に対応することを、私たちは常に求められています。東日本大震災のときもそうでした。ですから私たち教員が、ICT活用を促進すると同時に、ICTがなくても子供たちをしっかり伝えるすてきな授業が行える学級運営力を高めていくことは必須だと考えています。

### 試行錯誤を重ねながら

——ICTが教員の業務を軽減する可能性はあると思われませんか？

**藤永** 十年後であれば、あるかもしれません。

**杉本** 今は、出席簿から授業まで、従来のやり方にICT活用がプラスして組み込まれている

ので仕事は二倍になっているように感じます。**藤永** GIGAスクール構想によって、従来の仕事に加えてGIGAスクール担当としての仕事も課せられている教員が各学校にいます。各学校で比較的ICTが得意だという人が担当になるわけですが、GIGAスクール担当教員がそれまで抱えていた仕事を、周りの教員たちが引き受けることもあるので、結果として教員たちの仕事量は増えます。世の中では、ICT活用の「長」の部分ばかりが取り上げられていますが、実際の現場はそうではない、ということもご理解いただきたいところです。

とはいえ、ICTをうまく使いこなせたら質の高い業務が実現できるのは確かです。今、私たちは、ICT活用で、どうすれば業務をより効率的に効果的に進められるか、試行錯誤を重ねている最中ということでしょう。

——ICT活用の今後の課題は何でしょう。

**藤永** タブレット端末などデジタルツールがもっと身近になることが大事だと思います。今、とても高価なものという扱いですが、文房具のように学びに欠かせないアイテムとして、もっと手軽に使えるものになる必要があります。そのためには、保険の整備なども必要で、自治体などの予算面の充実が求められます。鉛筆は書くツール、消しゴムは文字を消すツ



藤永啓吾先生  
(\*山口県からリモートで参加)

ル、端末は、調べるときに必要なツールです。分からない物事を探すときに、子供たちにも不可欠なツールとして日常的に使えるようにしていくことが大切だと思います。

**杉本** 現在の教員のICT活用の実態は、従来のやり方に無理矢理組み込もうとしている感じがします。今の世の中に合った制度やシステムになっていくことを期待しています。

**前田** そうですね。教員だけの会議でオンラインが積極的に使われていることは、現時点ではありません。

**藤永** 完全に会えなくなったのであればオンラインで会議せざるを得ないでしょうが、今は会えているのですから、その必要がないということでしょう。現時点では、オンラインでなくとも事足りる。

ですから、ICTは教員の技量を高める一つの方法として活用を進めていくことになりま

す。とはいえ、デジタルに走りすぎると教員の技量が落ちる懸念は否めません。

**杉本** ICTの利点を生かせる場面には積極的に活用して、そこで生まれた時間の余裕を対面で行うことが大事な場面で使いたいです。例えば、Aードリルなどを用いて、個別に課題を進め、教室では、対面でしかできない授業を行う、というような。個別最適化された学びを現でできるように、学校教育に携わる人材を増やす必要があると思います。社会の変化が学校現場に反映されることを願っています。

### 子供が楽しめる授業づくりを

——今後の道徳科のあり方についてお聞かせください。

**藤永** タブレット端末が普及しても、相手を見ながら語り合える道徳授業が大切にされるようになってほしいと思います。タブレットは使えば使うほど端末に目がいきます。道徳はもちろんです。人間の関わりは、果たしてタブレット経由で全て済ませられるものなのか、と。一人一台の活用は近々実現するでしょうが、それ以上に人を感じる教育ということも求められているのではないかと思います。

**前田** 私は、ICT活用に取り組み始めてまだ

日が浅いので、いろいろな可能性を探っていきたいです。藤永先生がおっしゃるように、人と人とのつながりや関わりを感じながら活用すること、例えば、「いいね」機能などを活用すれば互いの意見を認め合うことができると思います。失敗しながらも探っていききたい。今までICTはドリル的なイメージがあったのですが、そうではない活用の仕方がこれから出てくると思うので、そうなれば道徳にも生かせると思います。勉強しながら活用していききたいです。

**杉本** 道徳に関しては、どんな環境になったとしても、子供たちと楽しい授業をしていきたいです。授業をしたときに、子供たちが楽しんで参加できないならば心にも頭にも残らない授業になってしまいます。どんなに優れた指導案や教具を作っても、子供が積極的に参加している姿が実感できないと、教員も楽しいと思えないし、やりがいを感じられません。タブレット端末を使うようになったら、タブレットを介して子供たちが成長する姿を見取る目を教員はもたなければなりません。ここが課題だと思います。

どのような環境になったとしても、授業は教員と子供たちと一緒につくり上げていくという大前提を忘れずに、授業に臨みたいですね。

# SDGs× 道徳

連載 第8回

## ●はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、生徒の間で新型コロナウイルスに対するネガティブな意見ばかりが横行し、行き場のない怒りや苦しみを感じているようだ。そこで、日本だけでなく世界に視点を向けると、感染拡大により様々な問題が発生しており、それらの問題がSDGsにも関連していることに気付かせたいと思い、本授業を含む単元を計画した。

生徒たちが、新型コロナウイルスに対してネガティブな気持ちを持つだけでなく「新型コロナウイルスをきっかけに、私たちが生きる地球を、より良い姿に変えていく」という態度を養い、自分たちにできることを一つ一つ行動に移していけるよう、本授業を行った。

## ●授業づくりの過程と目的

本道徳の授業は、英語の全6時間の単元計画の間に組み込んだ、教科横断型学習の取り組みである。

英語の授業ではSDGsについて学習し、SDGsに関連する英文を読んだり、単元内の新出文法を用いて生徒が感じたことを英語で表現したりする取り組みを行った。

本授業の前の時間では、新型コロナウイルスに対する今の自分の気持ちをワークシートに書き、グループ内で話し合った。また、ヴィヴィアン・リーチさんが書いた「コロナウイルスから人類への手紙」を読み、世界で発生している課題がSDGsと関連していることに目を向けさせた。

道徳の授業では、身近な社会的課題を自分との関わりで考え、その解決に向けて取り組もうとする意欲や態度を育てることを目的とした。

## ●授業の展開

【ねらい】

SDGs達成に向けて、自分たちの生活の中で改善すべき課題について具体的に考え、自分から動き出すことの大切さを自覚し、その解決に向けて取り組もうとする意欲と態度を養う。

【展開】

①放置された冷蔵庫、古タイヤを運ぶ男性、ゴミが散乱し

## SDGs実践紹介④

### 自分たちの力で状況を変えていく意識を持ち、行動に移すことの大切さについて考える

広島県広島市立二葉中学校教諭 中山 舞



た風景など様々な角度から撮影された富士山の写真を提示。写真がどこで撮影されたものか想起させる。

②富士山が2013年に世界文化遺産として登録されるまでに、ゴミの不法投棄や山小屋のし尿処理など、環境保全の面で大きな問題があり、「自然遺産」での登録を断念した経緯を説明する。

③登山家である野口健さんの手記を読み、野口さんの心の変化について発問をし、野口さんの気持ちを想像させる。

④「それぞれが『自分たちの力で、この状況を変えていく。』という意識を持ち、行動に移すことで、世界は確実に変わっていく。」と感じた野口さんが、富士山の清掃活動に参加したり、ヒマラヤ付近に住む子供たちへの教育支援を行ったりしていることを紹介する。(これらの問題がSDGsのゴールに関係していることにも触れる。)

⑤野口さんのように、SDGsにつながる日常にある問題を解決する意識を持ち、行動に移すために何ができるか、普段の自分たちの生活を振り返り、グループで話し合わせる。

⑥話し合いで出たアイデアが、SDGsの17のゴールとどのようにつながるか全体で共有し、様々な意見を聞き、自分の考えを深める。





## ● 生徒の発言・記述

※ ( ) 内の数字は、生徒たちが関連すると判断したSDGsのゴールの番号。

- ・料理をするときに食品を無駄にしてしまうことがあるから、計画的に買い物をして食品ロスをしない。(1, 2)
- ・お菓子は消費期限が短く、捨ててしまうことになるので、食べないお菓子は買わない。(2)
- ・ご飯を残さないようにする。バイキングでは必要なものだけを取る。(2)
- ・授業中うっかり寝てしまわないようにする。(4)

- ・シャワーの流しっぱなしを止める。(6)
- ・ゴミの分別をきちんと行う。(12)
- ・エコバッグを持って行き、買い物のときはプラスチック製の袋を断る。(13, 14)
- ・SDGsについて学んだことを家の人に伝える。(17)

## ● おわりに

本道徳の授業は、1年生の全7クラスで実施した。終了後に各担任の先生とSDGsについて深めたり、生徒の意見を交流したり、有意義な時間を持つことができた。道徳の授業では、すべてのクラスで同じ題材を扱うことにしており、SDGsを学年や学校全体で考え、広めていく良い機会になると考える。

本授業の実践後、家庭科の授業でも頻繁にSDGsの内容を扱うことから、道徳での話が家庭科の授業で話題になった。また、「私のSDGsコンテスト」の記事をインターネットで見つけて家族で参加した生徒もいた。授業が終わってもSDGsに関連した話題について、学校内で頻繁に聞くことができた。

今後も、道徳の授業をきっかけとして、教科横断的にSDGsというものさしを使い、物事を多面的・多角的に考えられる授業をつくっていきたい。

## ● 実践のポイント

広島市立二葉中学校の中山先生の取り組みは、世界で起きていることを自分事にする学びを、身近でイメージしやすい、コロナウイルスパンデミックというテーマから行なった、分かりやすい実践です。

コロナ禍は日本だけで解決できるものではない、地球規模の課題であるという視点からスタートしていることが、一つ目の重要なポイントです。

二つ目のポイントは、教科横断型の学習として、英語と道徳をSDGsという共通テーマでつなげたことです。他教科でその特性を生かした授業を行い、道徳では社会と自分との関わりを扱うという教科横断型学習の取り組みは、どの教科担当の先生にも参考になるのではないのでしょうか。

三つ目のポイントは、同じ題材をそれぞれの先生が扱うことにあると考えます。先生によって興味関心や授業スタイルは異なります。しかし、「生徒一人一人が自分たちの力でこの状況を変えるために何ができるか問い、どのような行動ができるか考えられるようにする」というゴールを共有することで、それぞれのスタイルを生かした進め方ができます。さらに、教師間の振り返りの中でお互いの優れた取り組みを見つけたり、それぞれのよさを伸ばしたり、連携を強化したりするきっかけになると考えます。

授業の進め方や道のりは必ずしも同じではなくてもよいし、同じ型を同じように実践するのは現実的に難しいかと思えます。ゴール(学習目標と評価につながる視点)を共有して、それぞれの先生のオリジナリティを生かせる仕組みをつくることで、大きな抵抗感なく、学年や学校全体で取り組むことができると考えます。

「持続可能な社会の創り手」の育成が求められている現在、パンデミックを学習の素材として扱い、社会の問題を見つめ、自分たちは何をすればよいのか、何ができるのかという大きな問いについて考えるチャンスと捉えてみてはいかがでしょうか。

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 調査・研究統括 木村大輔

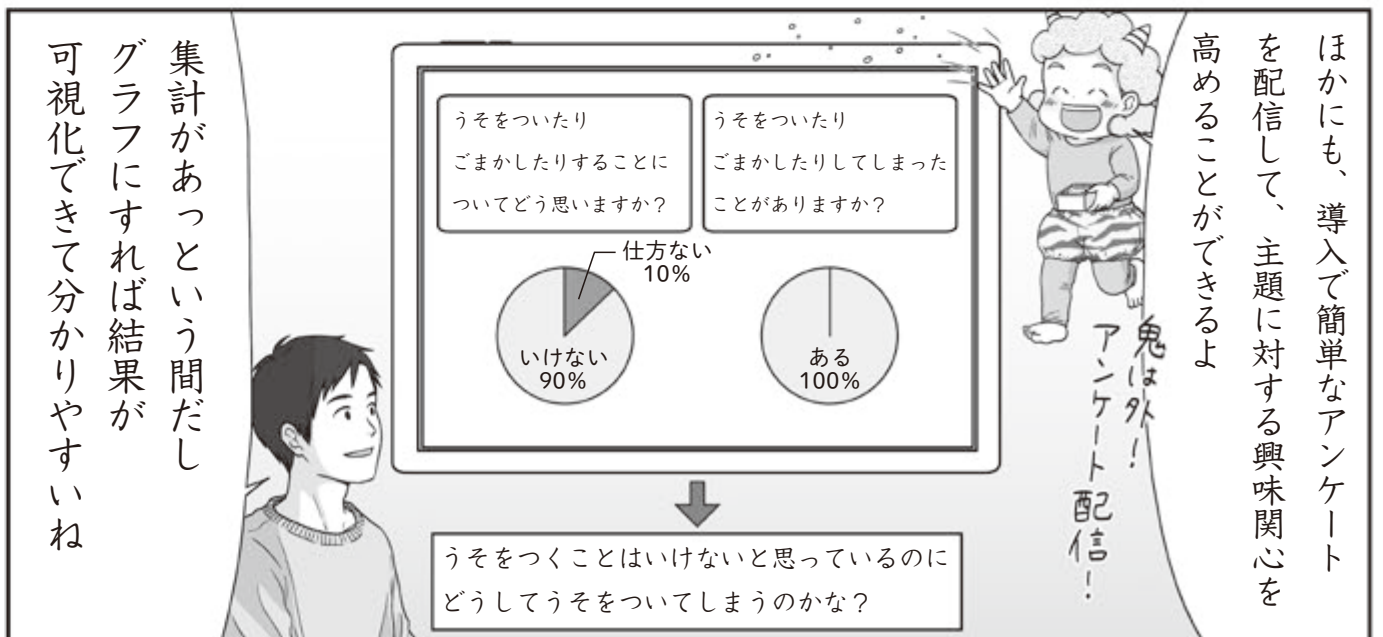
# どうなるこれからの道徳授業

連載14回 ICT活用編

監修・法政大学兼任講師 廣瀬仁郎先生  
マンガ・のはらあこ

とくちゃん

先生



子供たちの心情図から  
あえて異なる考えの子を選んで  
役割演技をしてもいいね

友達が間違っただけをしたとき  
伝えますか？ 伝えませんか？

展開で、タブレットに  
意見を記入して共有  
したり、心情図などの  
ツールで自分の立場を  
表したりできるよ

伝える 伝えない

バーの中で  
自分の心情に  
近い位置を示す

サムが団員に怒っているとき、部屋の隅に  
いたピエロは何を思っていたのだろう

例えば「ブランコ乗りとピエロ」の教材で  
子供の考えを明確にするために、座標軸を  
活用できるよ

①自分やほかの人の考えを瞬時に捉える  
②意見交流をする  
③再度投票して考えの変化と根拠を深める  
こんなふうに活用してみよう！

サーカス団のため

許せない ← 許す →

自分のため

登場人物の心情を  
タブレット上の  
座標軸で示す

子供たちの意見を集計して、キーワード  
を出現頻度に応じた大ききさで表す  
「ワードクラウド」も注目されているよ

よい友達であるためにどんなことを  
大切にしたいですか？

親しさ 優しさ 信頼  
信じ合える  
安心 高め合い はげまされる  
アドバイス 助け合える  
自分を大切にしてくれる  
ライバル

これなら発言するのが苦手な子も授業に  
参加できそう！ 意見をすぐに共有したり  
可視化したりできるのもタブレットを使う  
よさだね



**道徳ジャーナル112号** 令和4年2月発行

発行所 株式会社学研教育みらい 発行人 甲原 洋／編集人 木村友一

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp> ●「道徳ジャーナル」のPDF版および電子版は、WEBページから。

9300007573

**\*LINE 公式アカウントのお知らせ\***

@おんたま先生 学研教育みらい

道徳や体育・保健体育、特別支援教育、ICT教育などの最新情報の配信や、先生のお悩みを投稿できるサービスを提供しています。

友達募集中!



QRコードをスキャンするとLINEの友達に追加されます。